第51回倉吉市社会福祉大会概要

日時：平成22年2月9日(火) 13：30～16：00
場所：倉吉未来中心大ホール

◆主催者あいさつ

【長谷川市長】

・国保の医療費が伸びているが、国からの充当は少ない。市では平成２２年度予算で市予算から充当することを検討している

・世代間で連帯して地域で支えていくことが重要。制度はもとより、一人ひとりが自分がより良く生きていく中で、周りの人にも目が配られ、より良くしていこうという精神が市民に宿るようにしていきたい。

【野島市社協会長】

◆来賓紹介・挨拶（村田県議、内海県社協会長）

◆表彰

◆講演「新たな地域づくりに向けて」(平井知事)

＜地域福祉について＞

・これからの行政は福祉が中心的なテーマとなっていく。

・室生犀星「ふるさと」…命というのは支え合うものというのが伝わってくる。

（雪あたたかくとけにけり　しとしとしとと融けゆけり　ひとりつつしみふかく　やはらかく　木の芽に息をふきかけり　もえよ　木の芽のうすみどり　もえよ　木の芽のうすみどり）

・命は生きていく間中繋がっていく。倉吉市社協はそれぞれ地域に根ざした取り組みを実践しておられる。さまざまな者（高齢者、子ども、外国人、その他支援が必要な者）が同じ地域で支えている。こういったことを地域で実践していくのはすばらしいことだと思っている。

＜アビリンピックでのボランティア体験＞

・私が福祉をライフワークとして重きを置くようになったのは、大学生の時の赤十字ボランティア経験から。

昭和５６年（１９８６年）に第一回のアビリンピック（障がい者の職業技能を競う大会）が千葉で開催され、その際にボランティアとして参加した。世界中から選手が千葉に集まり、この時はじめて障がい者のみなさんと親しくさせてもらい、障がい者も健常者といっしょであることを体感的に理解できた。

たとえば…

・目の見えない方が街で立っている。信号が青になった。さあどうするか。

当時は知らないものだから、手を引いてわたらせれば、と思っていた。

教わったのは、まず声をかけること。また手の平をつかむのではなく、ひじのあたりに触れてエスコートすること。こうすることで抵抗感がない。

・車椅子の人が階段の前で困っている。どうしたらよいか。

階段の斜面に向き合う形で、何人かで息を合わせて運ぶ。こうすることで恐怖感が薄らぐ。こういったちょっとしたこと、いわばごく当たり前のマナーを学んだ。それぞれの尊厳を分かってお付き合いをしなければならないことを教わった。

・アビリンピックでは、当時の時勢で学生の考えることでもあるが、ディスコパーティーを行った。そこで、障がい者の方がどのように楽しまれるかと思ったが、はじまってみると皆楽しそうだった。

たとえば、聾唖者の方が一番喜ぶのはダンスみたいなみんなで体を動かすことで、ずいぶん楽しそうに踊っていた。また、車いすの方は車椅子を上手に操っておられたし、目の不自由な方は女性の手をつないで楽しそうにしていた。

障がい者の方は不自由（Disability）があるに過ぎず、こんな風にそれぞれ暮らしているのだと知った。

・アビリンピックではタイのチームを担当した。担当してみて、聾唖者の方はそうと分かったが、それ以外の方はどこが不自由なのか分からなかった。合宿の入浴時の着替えの際に、はじめて義足であることが分かった。タイは敬虔な仏教徒の国ということもあって当時は日本以上に福祉装具が発達していたのかもしれない。

・選手に英語で話してもニコニコしているだけでどうも通じていないようだったが、そのうち日本のとは若干違うが手話が通じることが分かり、コミュニケーションをとった。だんだん仲良くなったのだが、洋裁の部門で銀メダルをとられた方がとても喜んでいた。その理由を聞くと、これで国に帰って普通に食べていけるというものだった。これを聞いてどうやって暮らしていくのかいかに苦労しているかということに思いが至った。

・こういったボランティア体験福祉との出会い。一人ひとりが生きている、心と心が通じ合えば大きなこともやりとげられることを体験した。アビリンピックの後で選手にアンケートをとったところ、十中八九よかったのはボランティアの対応、という回答だったことが何よりうれしかった。

＜地域での取り組み＞

・鳥取県から福祉を変えていきたいと考えている。政権交代もありコンクリートから人へというキャッチフレーズが言われている。コンクリートすらない鳥取県という現状もあり、すべてそう言っていいかは疑問だが、人間を大切にしなければというメッセージには共感。

・北欧を中心とした、地域の温かさ、支え合いを大切にというひとつの方向性がある。本当の意味での福祉社会を構築している北欧では、ＧＤＰの多くは教育、福祉に費やされているという現実がある。日本もそちらに向かった方がいい時期。東アジア新興国と張り合って産業を伸ばしていくことも重要だが、自分たちにできる温かい暮らしに目を向けることが

重要。
・国でも、子ども手当、高校無償化、障害者自立支援法の見直し、後期高齢者医療制度の見直しなど色々と政策の転換を図っているが、それだけでは十分ではない。子ども手当１万３千円が出るのであれば、それでどういったサービスを地域で受けられるか、別の意味でシステムチェンジを図らなければ。
・国が金を出して、受け皿として地域をつくって行くのは私たちであり、それを支える行政である。役割分担をしながらの地域づくりが必要。

【ふれあいサロンやまだ (北栄町由良宿山田さん)】

山田さんは支え合いコーディネーターの研修を受け、地域の人と支え合うふれあいの場を作っていこうと取組まれた。初動時に若干の補助はあったが、ほとんど自前で運営している。
先般、サロンを訪ねた。近所の人がたくさん集まっていた。ちょうど干支の虎の人形作りを行われていた。ほかにはフラダンス、給食サービスなどを行っておられ、介護予防や地域での支え合いを担っている。

【三朝町の給食サービス】

地域での２０～３０軒のボランティアで給食サービスを２６年にわたって運営されている。
一部町社協も関与。給食自体は３００円程度でそんなに高くない。給食そのもののほかに、戸別に配ることで孤立しがちなお年寄りとつながっていくということ。

＜高齢者施策＞

・引きこもりがちなお年寄りをどうやって引っ張り出していくか、体を動かすこと、周りに認めてくれる人がいることが生きがいにつながる。このことから、元気な高齢者を支えていきたい。県では元気高齢者データバンクを作っており、様々な分野に長けた人材を登録している。依頼者は経験を活用することが、高齢者は自分を生かす場を得ることができ、お互いにハッピー。いろいろな形で高齢者が元気に地域に出て行ってもらうことが重要。
・片方で認知症の方を地域で支えていく必要がある。県で認知症サポーター養成に取組んでいる。講習会を受けて支え合いの輪の中に、という仕組み。６，０００人育成を計画し、昨年秋に達成。もっと増やしていく。
・こうした取り組みを行っており、高齢者の方が安心して暮らしていける地域づくりが必要。

＜子育て支援＞

・県の出生率は１．４３と、全国平均の１．３７よりは上にはいるが、徐々に下がりつつある。
・子育て家庭にアンケートをとったところ、悩みの一番は教育・子育てへの経済的負担、２番目は子どもを預かってもらうといった子育て環境が整っていないことだった。
・経済的負担については子ども手当や高校無償化など検討されている。しかし、子育て環境についてはまだまだこれから。
・幼保一元化について、幼稚園と保育園を併設しているところはあるが、認定こども園は県

内に残念ながらない。４月から認定子ども園が稼動できるよう支援を検討している。幼稚園が小さい子を預かろうとすると今の幼稚園の施設のままではできない。そのため施設改修の費用を支援することや一定の運営の支援が考えられる。認定子ども園を運営してくれるところを精力的に募集しているところ。

・子育て王国建国運動についてプラン作りを行っており、意見を募集しているところ。

・なぜ鳥取県に子育て王国を建国する資格があるのか。…意外と子育て環境が充実している。

人口あたりの産婦人科医トップレベル

待機児童が４月時点でゼロ（年度途中は除く…支援策をＨ２２年度に)、全国的には驚くべきこと

子育て支援センターを全市町村で…全国トップ

ファミリーサポートセンター…トップレベル

こういった環境をもっと活用し、足りないところを補って子育て環境を充実させていく。

・県民のみなさんに建国運動に加わってもらってはどうか…子育て隊：みんなで子育てをしていく世の中にしていかなければ

・多胎児の家族は大変で悩みも多い。県西部では多胎児家族のネットワークが結成され、情報交換や支援が行われており、評判が良い。悩みを共有できて安心、心強いとのこと。こういった取り組みを全県的に展開していければ。

・子どもの医療費支援について、何歳まで無料かは市町村で異なるが、市町村長と話し合って引き上げることができれば。

＜障がい者施策＞

・障がい者施作を変えていく仕組みも大切。最近ではスーパーなどで障がい者が作っている商品のコーナーも目にすることも多くなった。今までは作業所でも障がい者に作れるものをつくっていたが、それでは売る方で困ることも。

・滋賀県では障がい者の暮らしをかえるために売りやすい商品作りやマッチングに取組んでおり、鳥取県でも滋賀県に手伝ってもらって障害者就労事業振興センターからアドバイザーを派遣するなど作業所のサポートに取組んでいる。倉吉の事業所ではパッケージをデザイナーにデザインしてもらい高級志向のうどんの開発を行うなど、商品力をつけての事業展開を行っている。中には売れ筋の商品も。

・鳥取市のぱにーには普通のパン屋のように繁盛している。パン作りやレジなど様々に働いている障がい者の顔が見える。

・境港市のＦ＆Ｙ境港ではプラスチック包装を製造。普通の工場と同じように最低賃金なみの給与を障がい者に支払っている。工場誘致のため、母体となる福山市のエフピコに訪れた際に、欠品率で悩むことはないかと聞いたところ、最初の一月ぐらいはあるがその後は健常者とほとんど変わらないとのこと。これなどは健常者の固定観念だったのだろう。単純作業でもあり誰でも一生懸命にやればできる作業であることは自明のこと。

・鳥取北ジャスコの前の千代三洋は障がい者を雇用しているが、ここではＬＥＤ照明の製造を本格的にはじめたところ。
・徐々に世の中は変わってくる。
・障がい者といっしょに地域で暮らすマナーを学ぶため、あいサポーターバッジを配っている。障がい者にちょっとした気づかいして助けることができるという決意表明。５，０００人ぐらいまで急速に増えている。
・企業も加わりたいということで運動に共鳴する企業をあいサポート企業として認定。こちらも加えると１万人ぐらいに。
・あいサポート運動を鳥取県発の運動として広めていきたい。企業の認定を行うことで県外にも広がりを見せている。

＜結びに＞
・滋賀県は社会福祉の先進県だが、この基礎を作った糸賀一雄さんは鳥取県出身。滋賀県庁に勤務していたが、近江学園を創設し、「この子らを世の光に」という信念で福祉と教育にあたった。この取り組みが滋賀県内に広がり、滋賀県の福祉が進んで、やがて全国に広がっている。
・ちょうど百年前の１９１０年には遠藤董さんが鳥取市にはじめて盲唖学校を創設している。はじめは寺の境内に開設し、援助をもらったり、遠藤さんの絵を売ったりしながら学校を支えていった。後に県の学校になり、初代校長を務めて昭和２０年になくなられている。
・倉吉市の皆さんにも福祉に関わる鳥取の心を感じてもらえたらと思う。様々な者が支え合いながら豊かに暮らす社会を作りたい。県庁も精一杯頑張るので、皆さんも多くの笑顔に会っていただきたい。

＜質疑＞
・県内にはノンステップバスが限られている。また、リフトアップバスを所有する事業者がいない。この現状をどう考えられるか。（福長さん）
⇒（知事）
◇国全体でバリアフリー法を制定して取組んでいるが、障害者自立支援法あたりから風が冷たい。県は県なりにやっていきたいと思う。
◇バスについてはバス事業者が購入しなければどうにもならないが、経営の問題もある。バス会社と話し合ってみたい。
◇大都市であれば利用者も多く賄えるが、鳥取県の事情では難しいところ。大きい車でなくとも何とかなるのではないかとも思う。いずれにせよ向こう１０年ぐらいには何とかなるよう話し合ってみたい。

＜質問内容について聞きとれず＞（鳥飼会長？）

⇒（知事）

◇あいサポート運動は鳥取発の取り組みとして広めていきたい。

◇支え合いはまずは実践だと考えている。

◇そういった意味では関金町の鳥飼さんの活動に注目している。鳥飼さんは牧場で小学４年生の子どもを対象に出産の立会いや牛の出荷の立会いなど命の尊さの体験に取組んでいる。

◇先駆けて切り開くということでは、２月議会で議論したいことがいくつかある。

◇ひとつは農業と福祉の合体。農福連携事業を鳥取から始める。県で指導者を派遣するなど。

◇作業所の販路開拓の初動の資金について、銀行がなかなか貸してくれないということがあるため、無利子融資を検討している。全国初。平成２２年度から実施したい。

◆実践発表

社地区地域福祉計画の策定
大正町ふれあい・いきいきサロンの取り組み　｝資料のとおり